

5. 山頂小屋 ものがたり

<最新鋭の頂上小屋>

- ・ 大山夏山登山道の9合目付近の木道から三つの風車が見える。これが全国に先駆けて作られたエコトイレの風力発電装置である。
 - ・ 中高年を中心に登山ブームが広がる中、全国各地の山でトイレの処理の問題が大きく取り上げられるようになり、大山山頂でも同じ問題を抱えていた。大山では、雨水を利用して特殊な方法で処理し、再び水洗の水に使えるように浄化するトイレを全国に先駆けて採用した。その処理にかかる電力も、風力発電と太陽光発電でまかなうシステムを採用している。つまり、自然に優しい自給自足のトイレということとなる。
- ☑ 伝承者 広瀬浩一氏：鳥取県文化観光局景観自然課長
- ✓ 大山では全国に先駆けてエコトイレを採用している。4本の風車を利用した風力発電と太陽光発電により頂上小屋の電気をまかなっている。
 - ✓ 東北地方で実用化されている風力発電のシステムを参考にした。しかし、予想以上に厳しい気象条件により風車が樹氷のようになり、冬期は使えなかった。

<山頂小屋のおばあさん>

- ・ 大山山頂には、エコトイレの付いた避難小屋がある。いつからこの山頂小屋があるのか定かではないが、昭和10年前後にはあった。
- ☑ 伝承者 遠藤勝壽氏：
- ✓ 昭和10年頃小学校の高学年の時に学校から大山登山に行った。その時、大山の頂上には、屋根が地面に付きそうな小屋があり、細い屋根には土の付いた草がかけてあった。その小屋では、山崎さんというおばあさんが豚汁を売っておられた。
 - ✓ そのおばあさんは「よう来たな」と言って豚汁をごちそうしてくれた。とにかく寒い日であったので、子ども心に大変嬉しかったことを覚えている。
- ・ このころからすでに頂上の避難小屋はあったようである。ちなみに、この時のおばあさんは、大山のスキーの創生期を支えた山崎三姉妹のお母さんであった。

<大山遭難の歴史>

- ・ 明治39年大阪毎日新聞社の探検隊が大山の登頂し、3泊の野営をしたという記録がある。その当時は、大山山頂は「探検隊」が行くところであった。大山登山が一般的になったのは、大正時代に入ってからであったのだろう。
 - ・ 大山は中国山地から少し離れた独立峰であり、日本海から吹き付ける季節風をまともに受ける。北アルプスなどに比べて標高は低いものの、冬期の気象条件は厳しく遭難事故も後を絶たない。大山夏山登山道の7合目と8合目の間に木製の遭難碑がひっそりと建っている。これが大山ではじめて遭難した人たちを供養するための碑である。
- ☑ 伝承者 遠藤勝壽氏：
- ✓ 昭和12年12月5日安来の草鳴社という登山愛好家のパーティーが下山途中にこの碑のある辺りから登山道はずれ遭難した。4人のパーティーの内、1人は生還したものの3人が亡くなった。この碑のことを「草鳴社ケルン」とよんでいる。

- ・ 最近でも日本を代表する登山家である高見和成さんが二度（平成 5 年、平成 8 年）の遭難に遭い命を落とした事故が思い出される。
- ・ 大山で遭難救助隊に参加したことのある遠藤氏に救助の様子を聞いた。
- ☑ 伝承者 遠藤勝壽氏：
 - ✓ 昭和 34 年、登山仲間が帰ってこないとの一報を聞き、大山に駆けつけた。
 - ✓ 朝早く、宝珠尾根・ユートピアから登り捜索に向かった。天狗尾根から下の方に滑落している 2 人を見つけたときは、まだ早朝であった。
 - ✓ 尾根から遭難者のところに降り、シュラフで遺体を包み、ザイルで尾根まで持ち上げたときには、すでに夕方となっていた。
 - ✓ 灌木を切り遺体をたくさんのザイルで縛り、それをザイルで後方と前方に数本張り尾根をユートピア・宝珠尾根に向かったときにはすでに日が落ちていた。
 - ✓ ヘッドランプの弱い光を頼りに宝珠沢に降りた時には、灌木のそりもこわれて遺体の一部がむき出しになっていたことを覚えている。
- ・ 博労座まで帰ってくるとすでに深夜の 3 時頃であった。遺体を警察に渡した伝承者は、勤務していた学校の宿直室の布団に潜り込み生徒がきたのも、昼がきたのも、分からず眠り続け気がついたときは夕方の 4 時頃であった。
- ・ 北アルプスなど多くの山を登っている伝承者であるが、登山人生の中で最もつらく、悲しい思い出であると語る。

< 大山自然保護の歴史 >

- ・ 大山が国立公園に指定されたのは昭和 11 年 2 月である。日本ではじめて指定された国立公園は、昭和 9 年に制定された瀬戸内海国立公園である。
- ☑ 伝承者 澤自然保護管：環境省山陰事務所
 - ✓ 国立公園制度ができた頃、その制度の目的は日本を代表する景勝地を保護し、外国人観光客を誘致して外貨を獲得しようとするものであった。
 - ✓ 明治時代、船で日本を訪れる外国人が通り、静かな海と風光明媚な景色に驚いたという瀬戸内海国立公園が最初に指定された。
- ・ その 2 年後に大山も国立公園に指定されており、日本でも最も古い国立公園の一つといえる。そのような国立公園制度も次第に自然保護に力を入れるようになり、昭和 24 年に特別保護地区の制度が制定された。特別保護地区とは、その地区内にある動植物を採取することはもちろん、落ちている葉っぱすら持ち帰ってはいけない所であり、鳥取県内では大山の山頂と鳥取砂丘の真ん中が指定されているという。
- ・ 昭和 40～50 年代にかけての観光ブームにより 200～250 万人もの観光客が大山を訪れるようになった。多くの登山客が山頂に上がり、無秩序に散策するため大山山頂の植物が全くなり、土がむき出しの状態となった。
- ・ また、観光客が残していくゴミ問題も深刻化してきた。

- ・ そんな状況を受けて昭和 52 年官民一体の「大山をゴミから守る県民運動連絡協議会」結成され、春と秋の年二回、大山全域の一斉清掃を行うことになった。昭和 53 年の一斉清掃では、13 トンのゴミが集まり最高を記録している。
- ・ その後、ゴミの量は減少を続け、現在ではピークの 10 分の 1 にまでなっている。
- ☑ 伝承者 広瀬浩一氏：
 - ✓ 大山での自然保護運動は、全国的に見ても先駆的な取組である。
 - ✓ 特に、民間からおきてきた活動であることが意味深い。いわば、大山はゴミ持ち帰り運動の発祥の地ともいえる。
- ・ 昭和 59 年 10 月 27 日有志が大山山頂に集まり裸地化した状況を見ながら協議、下山後実状を訴えた。昭和 60 年その報告を元に「大山の頂上を保護する会」が結成された。
- ・ 頂上を復元すると言っても、ただ植物を生やせばいいというものではない。特に大山山頂は国立公園の特別保護地区に指定されており、雑草一本勝手に抜けない場所である。元の山頂を取り戻すために環境省とも連携しながらいろいろな試みが行われた。
- ☑ 伝承者 遠藤勝壽氏：
 - ✓ 一木一石運動でいろいろな善意が各地から届くようになった。
 - ✓ しかし、もともと大山になかった木や石で大山山頂を復元する訳にはいかず、理由を話し持って帰ってもらった物資もあった。
- ・ 頂上での作業も厳しい気象条件により難航を極めたようである。最初は、麓で 2~3 年ぐらい育てたキャラボクやヤマヤナギなどを山頂に持ってあがり直接植えた。春になってあがってみると植えたはずの木が霜で 5 cm も盛り上がっており根付かなかった。
- ・ その後、わらをかぶせたり、椰子マット（椰子の繊維で作ったマット）、「こも」などを敷いて木を植えたが保水力がなく根付かなかった。少し厚みのある「むしろ」を使ってやっと成功したようである。
- ☑ 伝承者 遠藤勝壽氏：
 - ✓ ある年、自衛隊などに協力をしてもらい「むしろ」を使い植え込み作業を行った。
 - ✓ 作業も終わり頂上の避難小屋に泊まっていた。その夜台風が来て朝起きてみると「むしろ」がとばされていて、その場にいたメンバーで谷の方まで落ちているむしろを拾った覚えがある。
- ・ うまく押さえていなかったため飛んだものであるが、その後、しっかりとした間伐材を大きな杭で打ち付けてようやく飛ばないようになった。キャラボクはなかなか付かなかったため、最終的にはヤマヤナギや頂上に生える草などを植えるようになっていた。頂上を保護する会の活動や多くのボランティアの善意により、平成 5~6 年頃から緑あふれる頂上へと生まれ変わったのである。
- ・ 現在では、山頂付近の木道や登山道も整備され、毎年多くの登山客で賑わっている。
- ・ 大山の自然保護活動で特筆すべきことは、いずれの活動も民間の有志から起きていることである。やはり太古の昔から大山を愛する気持ちを抱き、その心が自然保護活の盛り上がりにつながったのではないだろうか。